

## 現代ドイツ文学事情

——ベルリン文学コロキウム〈夏の翻訳アカデミー 2005〉に参加して——

鈴木 芳子

筆者はベルリン南西、ヴァンゼー湖畔の瀟洒な建物ベルリン文学コロキウム (Literarisches Colloquium Berlin.<sup>1)</sup> 以下 LCB と略記) にて 2005 年 8 月 22 日から 28 日まで開催された〈夏の翻訳アカデミー 2005〉 (Sommerakademie 2005 Übersetzer deutscher Literatur) に参加した。拙訳『ベビュカンあるいは奇蹟のディレタントたち』 (カール・アインシュタイン著、未知谷) が幸運にも 2004 年度マックス・ダウテンダイ・フェーダー・東京ドイツ文化センター賞を受賞、その副賞がこの翻訳アカデミーへの招待・旅行奨学金だった。現代文学のメッカ、LCB はドイツの最も伝統ある文学支援機関のひとつであり、松永美穂氏が「ワセダ・ブレッター 12 号, 2005, 『ベルリン文学コロキウム——現代文学の交差点』」でその歴史と広汎な活動について詳述しておられる。5 月に公募で参加者を募り、8 月末に開催される翻訳アカデミーは、他国でドイツ文学の翻訳にたずさわる参加者たちに最新ドイツ文学情報を提供しており、当初の参加対象はヨーロッパ諸国だったが、近年拡大しつつある。所長はユルゲン・ヤーコプ・ベッカー氏、今回の参加者は 15 名、ヨーロッパ出身が大半で、ブラジルと中国からも参加、ヘブライ語翻訳者が 2 名いる他はあらゆる言語に一名ずつ散らしてある。〈夏の翻訳アカデミー 2005〉は現代ドイツ文学の動向に関する講演、いま話題の作家たちによる朗読会、東ヨーロッパ・ドイツ文化フォーラム<sup>2)</sup> や出版社訪問という充実したスケジュールを通して、翻訳者・文学関係者の国際交流の場となった。

LCB 一階ホールで催される一般公開の朗読会では休憩時間にワインが供され、聴衆はヴァンゼーの美しい夜景を眺めながらグラスを傾けている。日本で知名度の高い現代作家といえばノーベル賞作家ギュンター・グラス、マルティン・ヴァルザーやジークフリート・レンツといった大御所だが、今回 LCB で朗読したのは二十代後半から五十代前半の気鋭の作家で、彼らの意気込とあいまって会場は快い熱気に包まれていた。日本では朗読会も作家自身による朗読もあまり馴染みがないが、ドイツでは朗読会は作家の収入源であるばかりでなく、最近はその出版と同時に作家自身が朗読した CD が書店に並ぶことからわかるように「語ること」「聴くこと」に重点を置くドイツ人にとっては日常的な空間で、オペラ・観劇にも似た娯楽・社交の場であり、訪れる聴衆の層の厚さに文化の土壌の違いをみる思いだった。ここでは朗読会の中で特に印象的だった作家・作品を取り上げ、アク

1) LCB のホームアドレスは [www.lcb.de](http://www.lcb.de)

2) 東ヨーロッパ・ドイツ文化フォーラムのホームアドレスは [www.kulturforum.info](http://www.kulturforum.info)

チュアルなドイツ文学最前線の報告をしたい。

詩壇の新星シュテフェン・ポップ (Steffen Popp) は方々で精力的に朗読会を行っている。1978年グライフスヴァルト生まれ、現在ベルリン在住のポップは、今ここで朗読するのが嬉しくてたまらない様子で、日常生活の一瞬を平易な言葉で鋭く切り取った、彼の二冊目の詩集 „Wie Alpen“ (Kookbooks) を弾けるような生の歓びを全身にみなぎらせながら朗読。読む側と聞く側との密接なつながりを実感できる朗読会は彼の活動の原動力らしい。聴衆も強い関心を示し、次々と質問が飛び、彼はどの質問にもはきはきと丁寧に答えてゆく。今日、詩を取り巻く状況は大変厳しく、フランクフルトで開催される本の見本市でも詩集は一冊取り上げられればよいほうだと言われているが、そんな言辞を跳ね返すかのように、詩人と聴衆の間に活気ある濃密な時間が流れ、「抒情詩の新時代を切り開いた」「アルプスの言葉の山に登る牡鹿」(ともに Nora Sudn の書評から) は、今後の足取りにおおいに期待を抱かせた。

マリン・シュベルトフェーガー (Malin Schwerdtfeger) „Café Saratoga“ (Kiepenheuer & Witsch) とリヒャルト・ヴァーグナー (Richard Wagner) „Habseligkeiten“ (Aufbau Verlag) はともに故郷喪失者の郷土文学という流れをくんでいる。シュベルトフェーガーは1972年生まれ、ベルリンでユダヤ学とイスラム学を専攻、デビュー作 „Leichte Mädchen“ で2000年に〈Tagen der deutschsprachigen Literatur〉奨学金を受賞、初の長編小説『カフェ・サラトoga』ではポーランド移民一家の物語を思春期の少女の目を通して描いた。少女の父は一風変わった魅力の持ち主だが、女誑しでトラブルメーカーでもある。ポーランドでカフェを営んでいた父親は、彼の「憧れの西独」に移住し、職場を転々とする。いっぽう独語をマスターし、新しい生活に順応してゆく少女の心は幼いころ彼女の英雄だった父、長いあいだ偶像視してきた父親から次第に離れてゆく。小説の末尾で少女は姉や母と一緒に再び、一家の思い出のたくさん詰まったポーランドの半島ヘルを訪れ、物語は環を閉じる。何かを得ることは同時に何かを失うことだが、失われたものは追憶という形で再獲得される。着実に成長する娘と娘の成長を受け入れられない父親の姿を軸に、親との精神的決別、子供時代との決別など「得ること」と「失うこと」のモチーフが作品全体にちりばめられている。

ヴァーグナーは1952年ルーマニアのパナト生まれ、独語教師・ジャーナリストとして活動、独語で詩や散文を発表、反政府分子の作家たちによる文学政治結社〈Aktiongruppe Banat〉を主宰、1987年活動と出版を禁止され、以降ベルリンでフリーライターとして活躍、2000年には〈Neuer deutscher Literaturpreis〉を受賞している。前夫人で作家のヘルタ・ミュラーとともに亡命して以来、ヴァーグナーは二つの国について書いてきた。四世代にわたる家族の歴史に故郷喪失のテーマを絡ませて、歴史の渦に巻き込まれる庶民の姿を浮かび上がらせた „Habseligkeiten“ に彼自身の人生行路を重ね合わせてみると、いかに彼が深刻なテーマを感傷的になることなく節度と品位をもって表現する術を心得ているかがわかる。ドイツ語の〈Habseligkeiten〉はそもそも持っているだけで安らかな気持ちになれる日常の細々した品々をさすが、そこには物質性をこえて、移住・亡命・国外追放にとも

ない残していかざるをえない品々への名状しがたい愛惜の情、喪失感がつきまとう。小説の主人公ヴェルナー・ツィリヒは父親の葬儀のため、祖国ルーマニアのバナトに戻る。彼はドイツへの帰途を辿りながら一族の歴史に思いをはせる。アメリカへ移住したものの幻滅し、十年後にバナトへ戻った祖父、ロシアで捕虜となった父、チャウシェスクの独裁、そして国外追放されたわが身。ツィリヒは初恋の女性を妻に迎え、妻は共産主義独裁下のルーマニアではスパイが嗅ぎ回る国家機関に抗して固く結束した同志だったが、自由な西の世界では、夫婦のこの絆は薄れてゆく。ツィリヒはかつて馴染んだ故郷を捨てることもできなければ、西の豊かな暮らしに完全に根を下ろすこともできない二重の故郷喪失者だ。妻との離縁、娘との不仲。だが物語は思いがけない展開をみせ、「たえず真の故郷を求める強制移住者」ツィリヒはブタペストで売春婦クララに恋をし、「愛する人のいる場所こそ、わが故郷だ」と悟る。ずしりと重いテーマながら、時にコミカルな味付けがなされ、〈Habseligkeiten〉という音の響き同様のびのびとした穏やかさを漂わせる作品だ。

この二人の朗読は同日に行われ、大人への階段をのぼる少女の心の動きをハスキーな声で時に高揚感をもって朗読する新進作家シュベルトフェーガーと、自伝的要素をしのばせた小説を深みのあるバリトンで淡々と朗読するヴァーグナーは好対照をなしていた。

中国人ルオ・リングアン (Luo Lingyuan) は1963年生まれ、情報工学とジャーナリズムを学び、天安門事件後、祖国を後にし、1990年からドイツ在住、2000年アルフレート・デーブリン奨学金を授与され、ジャーナリスト・作家として活躍している。彼女は今日の中国を舞台にした十一の短編からなる „Du fliegst jetzt für meinen Sohn aus dem fünften Stock!“ (dtv premium) の中から、望まずして生まれた三番目の女の子を虐待して死に至らしめる両親を描いた作品を朗読し、聴衆に衝撃を与えた。飾り気もなければ劇的展開もないドキュメンタリー風描写であるだけにいっそう残酷さが際立つ。中国の一人っ子政策の陰で決して表に出ることのない事実をこうした形で公表することは、個人の人権、人間性を徹底的に押しつぶす国家政策への糾弾であり、同時に各人の心の奥に潜む残虐性、貧しい無力な人間が自分よりもさらに弱く寄る辺ない存在に向ける暴力性を暴き出す。彼女は後日、筆者あてのメールで「中国の公的・私的領域は暴力行為と恣意に支配されています。私は自分の人生において体験したこと、見聞きしたことを書き、中国の日常生活を少しでも、そしてより正確にドイツの人々に知ってもらいたいのです」と作品の意図を明らかにしてくれた。彼女は「私は政治的亡命作家というわけではなく、ただ文学をやりたい、自分の好きなものを書きたいだけです」と強調し、剛直で反骨精神に貫かれたジャーナリストチックな色彩の濃い、しかし中国では発表が難しいと思われる作品を書き続けている。

ひとりで作を朗読するこれらの作家たちと異なり、ダニエル・ケールマン (Daniel Kehlmann) の朗読は彼に非常に好意的な批評家三名によるインタビューと併せて行われた。ケールマンは1975年ミュンヘン生まれ、1981年家族とともにウィーンへ移転、ウィーンで哲学と文学を専攻、22歳で „Berrholms Vorstellung“ で作家デビュー、以後次々とヒットを飛ばし、《Süddeutsche Zeitung》や《Frankfurter Rundschau》にエッセイや書評を執筆、今もっとも注目されている作家のひとりである。「ケールマン、LCBで朗読会」と雑誌

《Deutschlandfunk, Deutschlandradio Kultur》9月号に彼の顔写真入りで前宣伝がなされ、当日は会場を埋め尽くす大盛況。彼の新作を人々がいかに心待ちにしているかがわかる。彼は五作目、„Die Vermessung der Welt“ (Rowohlt, Reinbek) を発売に先駆けて朗読した。一ヵ月後に発売を予定されているこの本は、大数学者カール・フリードリヒ・ガウスと自然科学者アレクサンダー・フォン・フンボルトの独創性と奇矯さ、偉大さと挫折を描き出した長編小説である。一方は抽象世界に生き、合理主義で世界を測ろうとする天才数学者、他方はオリノコ川からジャングルを突っ切ってアマゾンへ向かおうとする文字通り足で世界を測り、経験的世界に生きる地理学者。この二人が1828年ベルリンで邂逅するという設定だ。ナポレオン失脚後のドイツの政治的混乱を背景に対照的な二人の「冒険者たち」を配した着想の見事さ、史実とフィクションを自在に織り込み、アネクドートをつないでゆく鮮やかな手並み、ケールマン特有の切れのいいセンテンスにしばしば上品なユーモアが冴えるこの学者小説は、ガウス没後150周年を記念して出版される。マーケティングに直結させた売り込みや、澁刺たるテレビタレントを思わせる彼のそつのない「スター」ぶりは、インタビュアーとのやり取りにもあらわれている。(批評家)「お若いダニエル君に質問します」、(ケールマン)「若い若いといっても、もうすぐ30ですよ」、(批評家)「では29.9999999…歳のダニエル君に質問します」という冒頭の軽い応酬からもうかがえるように、親子ほど年の離れた批評家たちは聴衆に彼の「若さ」をアピールし、ケールマンは彼らの胸を借りて才気を遺憾なく発揮する。批評家側のこうした姿勢は「若さ」のもつ無限の可能性に文学の明るい未来を見たいという希望のあらわれであると同時に、意図的にスター作家を作ろうとしているという印象を拭い去ることができない。従来、書籍の世界では作者・出版・販売・読者と役割分担がはっきり分かれていたが、このように批評家と連携し、積極的PRを行う作家は総合プロデューサーの役割を果たし、朗読会で面談する批評家たちは作家を市場に売り出すエージェントの役割を担う。作品は芸術的成果によって世人に評価されるよりも、むしろ批評家に誘導されて最新流行の品として流通するのだろうか。「売れる商品」、ベストセラーを生み出すためには、作家が読者のニーズや販売促進という視点から従来の仕組みに揺さぶりをかけねばならないのだろうか。ケールマンの朗読会は、筆者に消費文化における作家と文芸批評家のあり方、文学の模索の道を考えさせるきっかけとなった。

文芸批評家フーベルト・ヴィンケルス (Hubert Winkels) は講演で、ドイツには文学賞が1000以上あり、地方の市町村や民間企業が設けた文学賞・奨学金も含めると2000にのぼる、そのいっぽうでイギリスのブッカー賞のような国際的成功を見込める決定的な賞がない、ビューヒナー賞は学術的規準を満たしていなければならず、それゆえ爆発的売上は望めないと語った。それでも筆者はLCBの朗読会に訪れる人々をみて、文学を愛する心と文学活動を支援しようという姿勢が地域社会に根づいているのを感じた。また長年ドイツでは純文学と娯楽文学の境界が比較的にはっきりしていたが、近年この境界線があいまいになっている、中間領域、グレーゾーンが大きくなっていると聞いた。この点は日本も同じであろう。日本の作家では特に村上春樹と多和田葉子が有名で、前者は恋愛小説のエクス

パートとして脚光を浴び、後者はドイツ語・日本語の双方で作品を発表し、しかも別の人間が彼女の作品を日本語・ドイツ語に訳出することに対して大変肯定的な態度を示している点が高く評価されている。

ベルリン出版 (Berlin Verlag)<sup>3)</sup>、アイヒボルン (Eichborn)<sup>4)</sup>、ローヴォルト (Rowohlt)<sup>5)</sup>の三社を訪問したが、ドイツ出版業界はアジア市場に注目しており、読書人口が多いうえに本の単価も高い韓国・日本に送るまなざしは熱い。最新ドイツ文学がどんどん日本で紹介されることが望まれる。翻訳アカデミーの参加者はもちろん、LCBや文化フォーラム関係者、出版社の編集者も、みな気持ちのよい親切な方ばかりで、筆者のスローで拙劣なドイツ語にこのうえなく好意的に丁重に接して下さった。皆様のご芳情に心より感謝申し上げます。

---

3) [www.berlinverlag.de](http://www.berlinverlag.de)

4) [www.eichborn-berlin.de](http://www.eichborn-berlin.de)

5) [www.rowohlt.de](http://www.rowohlt.de)